

## 402) 忘れえぬ女

リンゴの花の咲くころに 君はお嫁にゆきました  
君の手紙を読みながら 僕はひとりで泣きました  
変ることなく愛し合い 一緒になろうとあの時は  
約束したけど今はもう 遠い夢になりました

くちなしの花咲くころに 君は召されてゆきました  
花の香に包まれた 静かな雨の朝でした  
ひとの<sup>さだめ</sup>運命は悲しいと あの時君は言ったけど  
これがふたりの人生の <sup>とわ</sup>永遠の別れになりました

松虫草の咲くころに 信濃の山に行きました  
<sup>にゅうがさやま</sup>入笠山の頂上に 二人のケルン積みました  
あの日の記念写真には 今でも君は咲いてます  
忘れられない<sup>ひと</sup>女でした 僕の心の妻でした

<sup>おいらんそう</sup>花魁草の咲くころに 君のお墓に行きました  
もいちど君に逢いたくて もう逢えないと知りながら  
石の階段踏みしめて 丘の上まで来てみると  
大きな<sup>ねむ</sup>合歓の樹の下で 君は眠っておりました

繁る夏草踏みしめて お墓の前に<sup>たたず</sup>佇めば  
生きてゆくのも悲しいと <sup>せみしぐれ</sup>蝉時雨さえ泣いていた